

《10月例会報告》

気付きの概念化

座談

気付くはどの段階なのか

前回の会報で「気付き論争」と銘をうったところ、植垣さんから「論争とは思っていないんだが…」という問題提起があつて当日それについて様々な気付き論が展開された。

気付く→心づく→考えつく、の第2段階「心づく」が、気付くとの関連において長谷川さんはしっくりいかないというのがこれまでの話題のポイントである。ただ長谷川さんも論争とはいえず、植垣さんに対してただ独り相撲を取っているようだ、ともいう。論争とつけたのは私だが、これは今まで何回かこの話題が語られたからでもある。ここで論争かどうかを裁定するのはあまり意味がないが、庄司先生が「気付き論争」とつけたことが（徳永の）概念的発想であると概念規定も含めて言われたのでひとまず安心した。

石毛さんから介護における「気付く」は、経験すればわかってくることで大きな問題ではないのでは。気付くべきことをマニュアル化すればそれが概念になる、とストレートな発言があつた。

山田さんの豊富な知識で言語理解は知識人によっても微妙に異なるという印象を受

けたが、問題は「気付く」ではなく「心づく」の方であつたようだ。

小田さんから、感じる→思う→考える、と三段階をくり、柳田の年譜の作業の中で気付かされたことが多々あり、様々な段階で気付くがあるのではないかという発言にはなるほどと納得した。植垣さんにおいては認識の始めに「気付く」があつたようで、そのことによって第二段階の概念化の言葉が「心づく」になってしまったということであるようだ。気付くは、身体的な感覚をはらんでおり、その身体感が「気」を抱いた心や魂という精神的な動きと密接な距離感にあるため思考を難しくさせていたように思う。

だから庄司先生が「気付く」はやはり一段階である、と言われたとき話は振り出しに戻つたような気がしたが、「気付く」を「感じる」と同じ捉え方にすることによって第二段階の「思う」にうまくつながると納得した。

この座談では概念化についていくつかの貴重な意見が出た。そこには発言者がどの場面で概念化しているかの違いがあるようで上手く整理できなかつた。ただ、庄司先生が前回も言われたが「名付け」が一つの概念化だ、という理解は、概念化を日常化する上での重要だといえるだろう。

「人の道一生」の教材化への構想

篠原 賢明

死の教育にもつながる全面教育学の大きな柱の一つ「人の一生」（本稿では「人間一生論の研究」）を、今回篠原さんが構想として取り上げた。授業展開はこれからだが構想の中心は、「人間一生における「祝い、式、初め」」である。授業書の形で原稿が書かれ始めているが、紹介されたのは「(1)いのちの始まり、(2)ハラミブルマイとオカエシスル」である。

石毛さんが指摘するように、教材の重要性は分かるがどう現代化するかが課題であろう。そこには共同体の変質があり、間引きや望まれない出産などのプライバシーも含まれ、さらに産育習俗語彙をそのまま子供たちに披瀝しても伝わらないのではという懸念も見えてくる。

小田さんは、大学で学生に七五三を取り上げたとき、かつて子どもが幼くて亡くなっていったことが少なくなかったために祝う、と説明しているという。年中行事も含めてその意義やルーツをたどることが重要だ。

庄司先生は、行事のいくつかをお話（エピソード）として扱うことも含めて、特殊な例は排除した上で人生儀礼の一つの流れとして提示をすることは大切といわれた。

私自身が先月ホームページに投稿したことと重なるが、自分の父の葬儀に際して作成した父の一生のパンフレットが好評だったこと、一周忌に至る様々な行事において地域親族の共同体が生きていることを思い知らされた。まさに人の一生と死の教育は一つの流れをなしている。

現代化という課題は、メンバー自身が高齢化した今、単に学校教育にその活路を見いだすだけでなく、我々自身からの自由な

発信も含めて考えていく必要があるンおではないだろうか。

コトワザコンクール

伊東 峻

自分のクラスの子供たちに語彙力が弱いと感じている伊東さんが、コトワザは興味があるらしい子どもたちを前に「コトワザは比喩でできている」ことをねらった実践である。

冒頭「雲泥の差」を提示して理解を深めようとした伊東さんだが、学年主任の道岡さんとの差によって子どもたちが何となく理解してしまうという捨て身のアプローチが功を奏している様子が伝わってきて一同大笑い。

しかし、そこからコトワザをつくる段になると子どもたちの動きは鈍る。班で10分ほどの時間の相談でつくられた創作コトワザは以下の通りだ。

「社長と社員」「縄文と平成」「優勝と最下位」「1円と10000円」「札と紙」

これらのコトワザを講評し合う必要がある（植垣）、累諺を出すことによって裏の意味が自然に分かる（尾崎）、句会方式で互いを評価し合う（小田）、朝読書の中で比喩を探し合う（植垣）、選んだときに根拠を言ってもらいと認識が深まる（武田）などという貴重な助言が出て盛り上がった。伊東さんの次回を期待したい。

論理学講義

庄司和晃

今回の庄司先生のレジュメの内容は以下の通り。

- ・論理学序論：穴埋め式のプリントにより

思考の筋道を理解する。

- ・三段階論文づくり：アリンコとは何か。
- ・認識の論理：穴埋め式プリントを暗記させる。大仏を描かせ、肉髻珠（智慧の光）の存在に気付かせる。
- ・認識の論理（続）穴埋めプリント（認識ののぼりおり、キッカケことばの訓練、日本の認識、科学の認識）
- ・続 認識の「のぼりおり」論の新展開

レジュメの最後に『研究覚書』（1974）が登場する。そこには実践論、規範論、認識論が図示されており、認識論には三段階関連理論が登場している。第三段階目の「概念」の項には、推理—判断—概念の諸展開があると記されているのだがこの推理が今回の庄司先生の核心部分となっている。

概念を組み立てるときにたくさんの経験事例を重ねてから理論を導き出すのではなくある程度推論することの重要性がここでは述べられている。その中で示されている「ヤマカン」についての記述が興味深い。その体現者として三浦つとむが登場するのだが、それを明らかにした一人として「三浦つとむさんの論理はグズを対立物に転化する」と述べた今井誠さんの存在が浮かび上がってくる。

さらに時枝誠記の『国語学への道』に書かれているスペキュレーション（当て込み、見込み）が紹介されている。私自身は読んでいないのだが、この消息を聞いて学生時代の先輩の「直感」の話を思い出した。それは、「折口さんの直感はあまり当たらないが、柳田さんのはよく当たる」というものだ。柳田国男の手法も始めに結論ありきのものが多いと私は感じている。推理、ヤマカン、スペキュレーションは論を組み立てるための野心的な思考法なのだ。

紙面構成上詳しくは述べられなかったが10月の例会においてまだ紹介していない

重要な発言が2つあるのでここで取り上げたい。

①「気付く」の座談の最後に長谷川さんが、子どもたちの学習に「気付き」が弱くなったといている。（あるアメリカ人が日本の野球コーチに You teach over. といったというが、大人ですらそうなのだ。）自分から気がつく教育が忘れられているのは事実だ。認識が意識的な行為であるとするれば、人から教えてもらった認識や概念は自分のものになりにくいのは自明だ。

②山田さんが、看護学校の「科学認識」を読み、大変貧弱であるといったのは耳が痛い。つまり日本の公教育での理科学習が仮説や推量を行ってこなかった結果だからだ。『1たす1は2にならない』にも書いてあるが、失敗から学ぶことやなぜと問うことをおろそかにしてきた結果であることは言うまでもない。すべてが結果主義という資本主義経済の論理が、大事なものを見えなくさせているという気がしてならない。

常民大学は熱かった

10月26日東京・日暮里

前回小田さんが紹介した常民大学に尾崎さんと参加した。第28回を数える「常民大学合同研究会」だが、第1回の講演者だった庄司先生も今回出席されスピーチされ熱い拍手を浴びた。参加メンバーは高齢化しているが6つの常民大学の横のつながりは強く、とても熱いものを感じて帰ってきた。

1月例会

1月25日（土） 14:00～

成城大学本部棟3F

年報について、ほかレポート

■時枝誠記

『国語学への道』

「学者は自殺しない —ある酒場での会話—」

A ところでもう一つ聞かぬ。君のやってみることをみてみると、結論が先に出て、事実が 後を追いかけて行ってゐるように見える。事実をできるだけ集めて、そこから結論を帰納して 行くこの頃の実証主義者の逆を行ってゐるやうな気がする。

B あれは結論ぢやない。スペキュレーション(あてこみ、見込み)なんだ。学問の至極の妙味 は、スペキュレーションにあると、ぼくは思つてゐる事実を山ほど集めて、そこから素晴らしい結 論が出るだらうなんて期待するのは、学問の邪道さ。

A 酒がものを云つてゐるのでなければ、僕のやうな無精な人間には耳よりの話だ。なるほど、さういへば、西洋ぢや、相場の思惑も、学者の思惑も、スペキュレーションといふね。大学者 が大相場師と同じとは面白い。

B そりやさうだ。地球が円いと考へた最初の間人は、やっぱり大変な思惑師だよ。最初の見 込みさへ確実なら、事実は必ずあとからくつついて来るものさ。思惑をやる人間が無精なのぢ やなくて、資料の上に安心して寝そべてゐる人間の方が余程のんきだし、無精だよ。

A 確かにさうだ。資料にすがつて安心してゐれば、先ず、自殺に追い込まれることはなそうだ が、君のやうに当て込んで置いても、もしそれが外れたら、。夜逃げをするか、首でもくくるより外 に仕様がなくなるのぢやないか。

B 学問がスペキュレーションである以上、その危険は相場と同様に、免れない運命だ。しか し、それなればこそ、学問にもスリルが湧いて来るわけさ。スリルのない学問なんて、考へただけ でも、気が滅入ってくる。常夜の闇みたいなものだ。スリルを楽しもうとする限り、学者はなかなか 自殺しないよ。大分、酩酊放談した。そろそろ、神輿を上げようか。

(時枝誠記『国語学の道』 1957 三省堂)

全面研年報の作成のお知らせ

全面研年報は今まで編集を一手に引き受けて下さった向井さんが現場を離れたため、発行が危ぶまれていましたが、今回道岡さんと伊東君が編集印刷を引き受けてくれることになりました。例会でも確認しますが以下の要項で原稿を送って下さい。

締め切り：2月20日必着

原稿：サイズB5。そのまま印刷をしますので、読みやすい形をお願いします。

送り先：〒197-0003 東京都福生市熊川1642-42 道岡 義経
必要冊数を明記の上送ってください。